

## バドミントン競技の審判をするにあたって

選手がプレーに集中できるよう、真剣に、誠意を持って審判にあたってください。

### 【1】主審をするときの注意点(主審業務の流れ)

～試合開始前～

- (1) スコアシートを本部まで取りに行く
- (2) 選手を確認する ※ 名前を呼び、本人であることを確認
- (3) “トス”をする

～試合開始時～

- (4) スコアシートに開始時刻を記入する
- (5) 審判用語にしたがって、選手の紹介をし、「プレー」を宣言する

～試合中～

- (6) 審判用語にしたがって、大きな声でコールする
- (7) 担当ライン(線審が担当しないライン)…ショートサービスライン、センターライン
- (8) 競技規則違反(サービスフォルト、サービスコートの間違い等)があれば、適切に処理する
- (9) インターバルは、ストップウォッチを用いて計測する

～試合終了時～

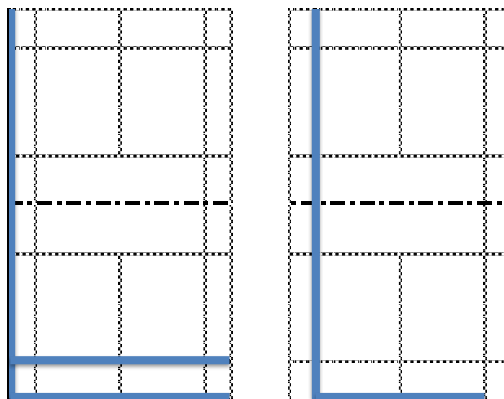
- (10) スコアシートに勝者サインをしてもらう
- (11) 審判用語にしたがって、試合結果のアナウンスをする

～試合終了後～

- (12) 終了時刻等の記入漏れがないか確認
- (13) 敗者を連れて本部へ行く
- (14) 本部でスコアシートの点検を受ける ※ 自分が記入したものは、自分が責任を持つ

### 【2】線審をするときの注意点

- (1) 担当ライン…〔図を参照〕
  - ※ センターラインは担当ではない
  - ※ サイドラインも端から端まで(相当に長い)
- (2) 椅子を適切な位置にする(シングルス/ダブルス)
- (3) 的確なジャッジをする 《右ページを参照》
  - ・椅子に浅く腰掛ける(体を動かしやすいように)
  - ・体を動かし、シャトルとラインとの位置関係をよく見る
  - ・自信を持って、素早く判断する
  - ・シャトルが床に落ちてからジャッジする
  - ・正しいシグナルを用いる
    - イン…右手をラインに向けて差し出す
    - アウト…「アウト」とコールし、両腕を水平に開く



※「オーバールール」にかかわって

基本的に線審は担当ラインについて全責任を持っているので、主審はあくまでも線審の判定を尊重しなくてはならない。「適当にジャッジしていても主審が最終判断をしてくれる」などと、安易な気持ちで線審をしてはならない。

＜良い例＞

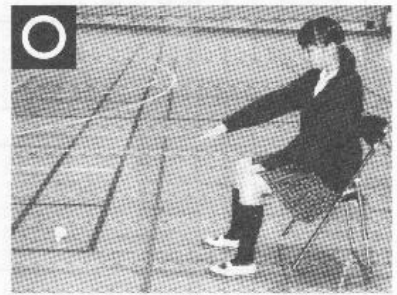


「アウト」の場合、両手をまっすぐに広げている。  
「アウト」の場合、担当ラインからどんなに遠い所に落ちてても判定する。

落下地点が判断できなかった場合。



「イン」の場合、右手を担当ライン上に指し示している。



＜悪い例＞

どのくらい「アウト」かをプレーヤーにアドバイスしている。(両手使用)



「アウト」の場合、片手で示している。



「アウト」の場合、両手のひらが曲がっている。

どのくらい「アウト」かをプレーヤーにアドバイスしている。(片手指使用)



うで組みしたり、足を組んだりしている。



「イン」の場合、右手が担当ライン以外のところを差している。

